

読売新聞 きょう（7月18日）のイチ押し

1面・社会面 京アニ放火殺人事件 発生から2年

36人の命が理不尽に奪われた京都アニメーション放火殺人事件は、きょうで発生から2年となります。大切な家族を失った遺族らは、年月を重ねてもぬぐえない深い悲しみに包まれています。

- ★ 作画を担当していた高橋博行さん（当時48歳）の父親は博行さんの死を受け止められないままだそうです。今も幼い頃の姿で夢枕に立ち、ほほえむ博行さんの冥福を祈って作りためた折り鶴を、18日の追悼式で供えることにしています。追悼式は、新型コロナウイルスの感染防止のため遺族らのみで執り行われ、事件発生時刻の午前10時半からユーチューブでその様子が配信されます。
- ★ 事件では、青葉真司被告が昨年12月に殺人罪などで起訴されました。しかし、被告自身が重度のやけどで今も治療中しており、初公判の見通しは立っていません。公判が始まっても、証拠が膨大で長期化すると予想され、事件の真相解明にはまだまだ時間がかかるとみられます。

3社面 コロナ「第5波」どう立ち向かう

本紙では、大阪が医療逼迫に陥った「第4波」の経緯を検証する連載を6月27日から7回にわたって掲載し、次への備えを検証してきました。大阪はここ数日新規感染者が300人を超える日が続き、「第5波」の入り口に立ったとみられます。再び医療を逼迫させないためにどうするか。大阪府の吉村洋文知事と府病院協会の佐々木洋会長は本紙のインタビューに、より感染力が強いとされるインド型を考慮し、医療体制の拡充が重要だと回答しています。第4波の教訓から病床の確保は進んでいますが、患者が急増した際にスムーズに対応するには、病床というハードだけでなく、人材を含めたソフト面の充実が求められます。

他紙と比べて

東京五輪開幕まで1週間を切りました。日本代表選手は前回東京五輪（1964年）の355人を大きく上回る583人にのびります。五輪特設面できょうと明日の2日間にわたって全選手を紹介します。